

「身代り」の倫理と日本の宗教文化

丸山敏秋

「罪あらば我を咎めよ天つ神民はわが身のうみし子なれば」(明治天皇御製)

はじめに

倫理運動を創始した丸山敏雄は、最晩年に体調を壊してやせ細り、昭和二十六(一九五二)年十二月に還暦を待つことなく逝去した。そのことに対して、敏雄を尊敬する人からも疑問の声を聴くことがある。「あれほど透徹した心境の人がどうして短命だったのか?」と。

その人生は五十九年七カ月であった。しかし寿命が短かったとは必ずしも言えない。昭和二十五年の日本人男子の平均寿命は五九・五七歳(女子は六二・九七歳)だったという。ただし、敏雄は若い頃から体格がよく、健康に恵まれ、保健衛生にも注意し、ほとんど病気とは縁がなかった。であるのに昭和二十五年の秋から一気に衰弱して、とくに激しい咳き込みを伴う呼吸器疾患の症状に苦しむようになった。敏雄の歌集『天地』には次のような歌が載っている。

苦しみのきはみに一夜明けんとす総身ばらばらに我が物ぞ無き

一日一夜咳き苦しみて尚し生ける糸の命の細ぼそとして

身も碎けるほどの苦しさがここに表れている。医師の治療は受けなかったので確かな病名などはわからないが、その症状から喉頭ガンを患っていたのではないかと推測できる。何がそのような異変をもたらしたのであるうか。病気の遠因としては、四十五歳になろうとする昭和十二（一九三七）年四月に起きた「ひとのみち」弾圧事件に連座して、約一年二カ月の獄中生活を余儀なくされた事実がある。仮出所を許されたとき、敏雄はひどく衰弱していた。不敬罪の罪人として非国民と扱われることでの精神的痛手も甚だしかった。そうした過酷な状況が人の老化を早めるのは当然であろう。

しかし徐々に体力は回復し、一連の裁判には精力的に取り組みつつ、終戦後は明澄な心境のもとで倫理運動に尽瘁する。もとより草創期の苦労は並大抵ではなかった。日々の多忙は心身に負担を強いるが、最晩年の敏雄が急激に衰えたのは、老化や多忙だけが原因ではなかった。そこにはつきりと見出せるのが「身代り」の精神と実践にほかならない。

丸山敏雄が提唱した「身代り」については、本人自身の論文「倫理における身代りの思想」に詳しい。この論文は亡くなる年の八月から時間をかけて書かれたものである。起筆されるまでには宗教教団「ひとのみち」との出会いから十七年ほどの蓄積期間があった。晩年の敏雄自身の「身代り」の決意と実践については、丸山竹秋が

『丸山敏雄 人と思想』の中で経緯をたどりながら詳しく解説している。

本稿ではそれらを踏まえながら、純粹倫理における「身代り」の元をなす「ひとのみち」に独特な「お振替ふりかえ」について論じ、「身代りの倫理」の特色、とくに日本の宗教文化との関連について考察する。現代表記では「身代わり」が標準だが、本稿では「身代り」と表記する。

なお、本稿は「丸山敏雄生誕一二〇年」に寄せて、月刊誌『倫理』二〇一二年五月号から「身代りの倫理」について」の通しタイトルで書いた三回の連載論文を一本にまとめ、加筆補正を施したものである。

第一節 「お振替」から「身代り」へ

1. 犠牲と身代り

唐突だが、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の罹災地を訪問したときの悲惨な光景が、筆者の脳裏から消えることがない。二万人に近い死者（行方不明者を含む）の大半が巨大津波によるものであった。その方々のことを「犠牲者」とも表現する。単に「死者」と呼ぶだけでは可哀想、申し訳ないといった配慮の気持ちも、そこにはあるだろう。他のさまざまな災害や事故の場合でも「犠牲者」と呼ぶことは多い。

犠牲とは本来、生け贄、すなわち神や精霊を祭るときに供える生き物（多くは動物）のことである。「犠」の文字にも「牲」の文字にも牛偏が付いているように、中国古代では神靈に供される動物として牛が多かったであろう。「義」の文字も羊と我（ノコギリの象形）から成り、羊は犠牲の動物である（白川静『字統』）。

丸山敏雄は上記の論文「倫理における身代りの思想」の中で、犠牲について「神意を慰め、加護を願うために、